

語り手 大原寿美子さんに連れて行った。
ん(明治40年生まれ) 竜宮へ行ったところ

あらすじ

昭和55年11月12日収録
が、魚の舞いから踊りか
ら歌からまあ、いっしょになくて亀のどこへ行き

「何をそげなことを悲

おなじみの動物昔話

もてないて、いっしょになくて泣くじゃそうな。「何しむことがあるかい。まあ、亀はもどるして、なつて、そつしたところ で泣くじゃ」。猿は「う た、うらの背なへ乗って、そいから、石ゆついは が、猿が腹をこわいて使ら、陸の浜辺の松の木の 生き肝を干いとるじやっ いこと持って上がったい 所へ起きたところが「猿 枝へ生き肝を干いた たら、じきい取ってくり て、亀の甲に何のかんの やええじゃ」。亀が言う はない小石を投げたもん もんじゃけえ、「ほんな じゃけえ、そいでまあ、 ラゲが、子守歌でうたい えしよう思つて、悲しゆ ら、乗してえ」言つて、 亀の甲は割れて、そぎや うてこたえん」って泣く してもどつて、まあ、「こ そして陸へ上がるど、じ ぎやこぎやあじやつた」 き、猿は「そ、そつと松 いうやあな、たいへんに の木の枝へ上がとつ 叱られるし、クラゲは、 て、何ぼしても下りてこ そんな、大きい骨は抜か んもんじゃけえ、「早う れるし、小骨は溶けるし 下りいや。もつ取つたら するよつなこつて、クラ ーナ。もつづつと、もう ゲは骨はのつなるし、そ 持って下りいや」いつて がして叱られたとや。 亀が言うのじゃそうな。 それぼつちり。

解説

「何がそげえな下りた

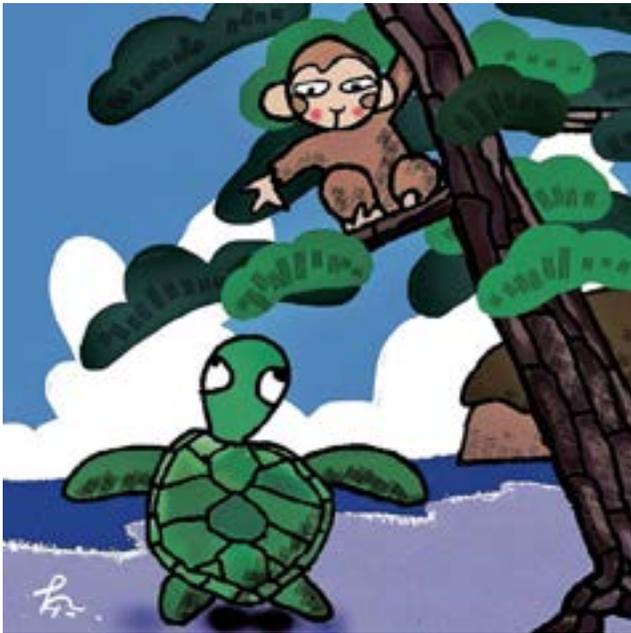
りするじゃあや。猿の生 ぎ肝や何やとつて、うら ぁ生きちゃあなんや、お じめの話であらう。関敬 られせんや。あほつ言つ 吾『日本昔話大成』によ たつて、猿の生き肝や何 れば、動物昔話の中に「猿 や、そげえな取つたり干 の生肝」として、その戸 したりするわけのもんじ 籍が示されているのであ やあない」いつて言つし てる。

(元鳥取短期大学教授)

(水曜日に掲載)

猿の生き肝

(八頭郡智頭町波多)



昔、竜宮の乙姫さんが病氣したりして「これは猿の生き肝でなければ治らん」いつとぞ、「猿の生き肝を取ってくるにや、だれを頼もつ」。「亀がよかろう」いつことになつて、亀を頼んで、亀が陸へあがつて、松の木に猿がおつたけえ、「おまえは山ぼつかりおつて、海の底う知らんじゃけえ、竜宮いつとこを見たかろうが」言つたら「見たい」言つた。「連れていってあげるけえ、うらの背なへ乗れ」。

猿が背なへ乗つて、竜宮